
古代の皮革 2. エジプト

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

紀元前4000年頃にはすでにメソポタミアでは文明が成立し始めていたが、エジプトでも人々はナイル川流域に定住して農耕や牧畜を行い文明の基礎を築き、メソポタミアの影響を受け発展させた。古代エジプトはアスワンにある第一急湍きゅうたん以北のナイル川流域をさすが、中流の溪谷と河口のデルタ地帯に分けられ、それぞれ上エジプトと下エジプトと称されている。前3000年ごろにはメネスによって上下エジプトの2つの国が統一され初期王朝時代に入り、古王国、中王国を経て、前16～前11世紀頃の新王国時代に栄え、エジプト史上最も領土が拡張した。古代エジプトにおいて、牧畜は農業に次いで盛んであり多数の家畜が飼育されており、皮は衣類や武具等に利用されていた。また野生動物の狩猟も行われており、これらの皮も利用されていた。中王国から新王国の主都であったナイル川中流域のテーベ（現在のルクソール）やテル・エル・アマルナの墳墓の壁画やレリーフ、副葬品から、当時の製革法や革製品について知ることができる^{1,2,3)}。

2. 皮革製品

生皮は湿っているときは柔らかく伸びやすいが、乾燥すると硬く縮み形体を保つ。この性質を利用して、古代の人は型を使用して好む形の入れ物を製作した。皮紐は石

斧の石を柄にしっかり縛りつけるのに使用し、その後は家具等の接合部にも使用した。古代エジプトでも、楽器ハープのケースやスキポット（壺状の容器）等が発掘されている²⁾。日本の正倉院に収蔵されている古代の漆皮箱もその類である。

古代エジプトでは一般人は裸であったが、紀元前2500年頃には庶民も革製あるいは革紐の付いた前掛けや腰巻きを身に付けた。後にパピルス製のサンダルが使用されたが、大部分は素足であった。身分の高い者は主に牛や山羊、羊の革製サンダルや短靴、編み上げ靴を履いていた。サンダルは古代エジプトの初期には白色であったが、その後黄色や緑色まれに青色に染色した。前2000年ころの革製のサンダルや衣服の切れ端がバラビッシュ（テーベの西北西約90km）で発見されている²⁾。このサンダルは現在の草履に似ており、1枚の革に足首にかかるような長い鼻緒のあるものであった。衣類の切れ端は穴を開けて臍あるいは細い革紐で縫い合わせてあった。ルクソール神殿の側壁に、聖舟の御輿をかつぐサンダルを履いた神官達が描かれているが、このサンダルは革製と思われる⁴⁾。さらに第18王朝のツタンカーメン（トット・アंक・アメン 在位前1361頃～前1352頃）王のテル・エル・アマルナの墓から木に皮を貼り付け、金箔で装飾したサンダルが発掘されている^{5,6)}。また第19王朝のテーベの墓から

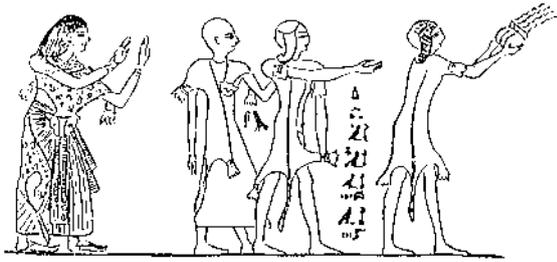


図1 古代エジプトの貴族や僧侶の毛皮
(テーベの壁画 B.C.15世紀)³⁾

ヒッタイトのレリーフにあるような嘴のような爪先が上向いた赤い山羊革のサンダルが発掘されている。古代エジプトには手袋の絵画はまれであるが、テル・エル・アマルナの墓には、王から高級官吏への贈り物の手袋があり、また別のレリーフには、官吏アイが王からの贈り物である手袋をはめている様子が描かれている²⁾。手袋は権力の象徴的な意味を有しており、その後支配者から忠誠を誓う家臣への贈り物となった。ツタンカーメンの墓からは、板に緑の革を貼り付けた矢筒も発掘されている。

美しい毛皮（特に斑点のある豹の皮）は脱毛しないで、盾や矢筒、鏡ケース、衣類、さらに椅子の覆いに利用した。前15世紀のテーベの壁画に見られるように、王や僧侶、貴族は鞣した尾付き毛皮を身に着けていた（図1）³⁾。図1の左側の女性の毛皮は斑点があるので豹の毛皮であり、男性のものは別の毛皮である。豹の毛皮はステータスシンボルの最たるものであり、王の神権を示す代表的な装束であった⁷⁾。ツタンカーメン王墓の壁画には豹の毛皮をまとった後継者アイが「開口の儀式」を執り行っている様子が描かれている⁴⁵⁾。この儀式を行う神官も豹の衣服をまとうならわしがあった。センネフェルの墓にも豹の毛皮をまとったセンネフェルの長子が描かれている。古代ギリシャのクラテル（ぶどう酒を水で割るための壺）にも豹の皮をまとったディオニュソスがゼウス（ギリシャ神話の最高神）

と共に描かれている⁸⁾。百獣の王とされるライオンの毛皮も権威や地位の象徴であった。中国では、虎の毛皮が同様の意味を有していた。センネジェムの墓には動物の皮を吊るしたイミウトとよばれる呪物が描かれており、皮や毛皮は宗教的な意味も有していた⁴⁾。なお日本では、豹や虎の皮は武士の行膝（乗馬の際に膝を覆うもの）や刀の尻鞘等に使用された。奈良の唐招提寺の重要文化財である衆宝王菩薩立像は鹿の皮をまとっている（2001.10検分）。

トートメス三世（在位前1502～前1448）からアメンホテップ三世（在位前1413～前1377）の時代にはエジプト史上最大の領土となり、ユーフラテス川に至るオリエントにおける最強の帝国となった。首都テーベには諸外国から戦利品や貢納物がもたらされた。テーベのレクミラー（トートメス三世に仕えた大臣）墓の壁画には貢納物を運ぶ外国人が描かれており、図2の上段にはクレタ人が壺のような金銀器を掲げ、袋を提げているが、袋は革製である²⁴⁾。その中にはギリシャのクラテルに描かれているヘレメス（メリウス）神のように金や宝石あるいは酒が入っていたかもしれない⁹⁾。下段には、ヌビア人がアフリカ特産の象牙や豹、ヒヒ、サル等の動物の他に毛皮を運ぶ様子が描かれている。これらの動物は食用ではなく毛皮として利用されたと考えら



図2 宰相レクミラーのもとへの貢献物を運ぶ外国人たち
(テーベの壁画 B.C.15世紀)⁴⁾

れる。毛皮は不鮮明であるので判断し難いが、象牙と一緒にものは黒い斑点があるので豹である。同じ場面の別の箇所には、キリンや犬、牛、馬、熊を連れたシリア人とヌビア人が描かれている。朝貢品あるいは献納品として、美しい動物の毛皮が喜ばれたのは古代エジプトに限らず、古代のオリエントや中国でも同様であった¹⁰⁾。

カバやワニの狩猟も行われ、これらの肉は食用にされたが、厚いカバの皮は盾や甲、鞭等に利用された。ワニの皮も革製品に利用されたにちがいない。

3. 皮革製造

皮の鞣し方法としては、赤鞣しと白鞣しがあり、前者はミモザの実やザクロの灌木、アカシアの果実等の植物タンニンを用い、後者は明礬を用いた。白鞣し革は指甲花(ヘナ)やアルカンナを用いて赤色に、紅花を用いて黄色に、インジゴ(インド藍、木藍)を用いて青色に染色した。古代エジプトや西南アジアでは槲没食子(蜂の産卵や損傷によって出来た槲のこぶ oak-gall-apple)が鞣し剤として使用されていた。これは槲樹皮よりタンニンを多く含んでいる。スマックの使用は確認できない。赤い手袋は明礬で鞣され、えんじで染色されたと推定される²⁾。テーベのレクミラー墓の壁画には当時の製革方法すなわち鞣し液の入った瓶への皮の浸漬、半月形ナイフでの切断、スコーリング(摩擦圧縮による清浄平滑化)およびステーキング(ヘラ掛け)の各作業が左から右に描かれている(図3の上段)²⁾。左上には皮で覆った楯があり、右上には尾の付いた革があり、この形が後に革を表す象形文字となった。図3の下段には、サンダル製造における底革への穿孔、そこへの紐通し、半月形ナイフでの革の裁断が描かれている。このほかにも製革作業

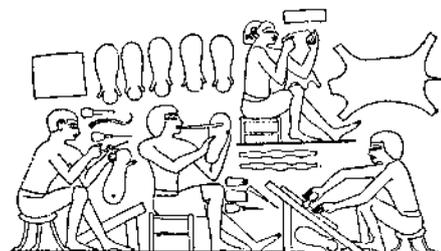
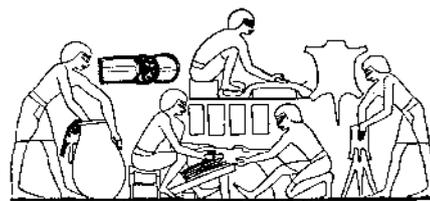


図3 古代エジプトの製革職人とサンダル職人(テーベの壁画 B.C.1450頃)²⁾

や革細工作業を表した壁画が幾つかある¹⁾。トートメス三世の時代の墓の壁画には職人が半月型のナイフで革を裁断しており、曲尺のような鉤型の革帯と楕円形板、三角形板、浮き輪のような円盤が描かれている(図4)¹¹⁾。革帯は戦車の車輪にらせん状に巻きつけ、楕円形板は鞍の詰め物、三角形板は弓の袋、円盤は革帯の巻いた物と考えられた¹²⁾。ツタンカーメンの墓やアメンホテプ三世時代の墓から発掘されたチャリオット(二輪戦車)の木製車輪はイラクのウル王墓やキシユ王墓のものとは異なり、車輪と軸が固定されず車輪だけが回転するもので、こし(中心部)と輻(や:こしと輪をつなぐ棒 スポーク)は生皮で覆い、車輪の外側には革がタイヤとして取り付けられていた^{12,6)}。ウル王やキシユ王の戦車も革を



図4 古代エジプトの革細工職人(テーベの壁画 B.C.15世紀)¹¹⁾



図5 「死者の書」の断片
(赤外線撮影 エジプトB.C.3000頃)²⁾

タイヤとして使用していた。チャリオットの床は皮紐のメッシュであり、車体の骨組みにも木材を革で覆ったものがあった。皮紐はチャリオットの接合部を強固にするためにも使用された。革で覆った木製の鞍やその他の革製馬具の残骸も発掘されている。皮革や革製品の製造工程を示す壁画は当時これらの作業に携わる職人の工房があったことを示している。

古代エジプトにおいて、書写材料としてパピルスが紀元前3000年ころより使用されていたが、その代用品として、第18王朝時代(B.C.16～14世紀)しばしば原始的なパーチメントが使用された²⁾。カルナックの年代記に、王の行為がアメン神殿の革の巻物に記録されていると記されている。古代エジプト人は来世での復活を願った呪文を作り、それをパピルスの巻物に書いてミイラのそばに置いた。このような巻物は「死者の書」と呼ばれるようになった。パピルスの代わりにパーチメントも使用された(図5)²⁾。

4. まとめ

古代エジプトの墳墓から革製の前掛けや帽子、サンダル、紐、クッション、枕、武器、工芸品等の副葬品、さらに皮革や革製

品を製造している様子を描いた壁画が発掘されている。毛皮や皮革製品は王族や貴族、宗教者等身分の高い人々に主に使用され、多くは権威や地位の象徴あるいは宗教的な儀式に利用された。

文 献

- 1) Körner, T. : "Handbuch der Gerbereichemie und Lederfabrikation", I-1, (Grassman,W., Hg) , Springer-Verlag, Wein (1944) P. 1.
- 2) Waterer, J. W. : "A History of Technology", The Clarendon press, Oxford, (1956) P.147.
- 3) Kobert, R. : "Beitrager zur Geschichte des Gerbens und der Adstringentien",Verlag von F.C.W.Vogel, Leipzig (1917) P. 9.
- 4) 講談社出版研究所編:世界の聖域 1, 聖都テーベ, 講談社 (1982) P. 33, 68, 100.
- 5) 仁田三夫: 図説ツタンカーメン王, 河出書房新社 (2005) P. 66.
- 6) 川村喜一編:世界博物館 17 エジプト博物館, 講談社 (1978) P. 108, 116.
- 7) 下山晃: 毛皮と皮革の文明史, ミネルヴァ書房 (2005) P. 66.
- 8) ベルリンの至宝展, 神戸市立博物館, 2005.7.
- 9) アレクサンドロス大王と東西文明交流展, 兵庫県立美術館, 2003. 11.
- 10) 西村三郎: “毛皮と人間の歴史”, 紀伊国屋書店 (2003) P. 48.
- 11) Kobert, R. : *Collegium*, Nr. 576, 117 (1918).
- 12) Kobert, R. : *Collegium*, Nr. 579, 198 (1918).